◆【海員随想】BISKRA号航海記(20)① 新木繁雄

6月29日 シンガポール接岸中

アンカーのホースパイプ(錨を収めるときチェーンが通るパイプ)に関し、船長が手紙を書き、造船所とCNAN(アルジェリア国営海運)へ送った。またそれをコピーして、船長と保証技師(私)が保管することにした。

内容は「スペインでも日本でも修理したけどよくなる。ここシンガポールで完全に修理し、通常の状態でアンカーが落ちるようにならねば出港しない。修理費用、ロスタイムはすべて造船所の負担とする。なお、この欠陥の調査のためロイドの検査官を呼ぶ」などと書いてある。私としてもここで完全に修理してもらった方が、今後この問題で頭を悩ますことがなくなるから、ぜひやってもらいたい。

船長がエージェントへ行っているのを見に行こうと、午後4時30分頃上陸した。途中猛烈な渋滞にはまり込み、エージェントへ着いたら6時を過ぎていて、船長は帰った後だった。

エージェントの話では、日本からは何もテレックスは来ていない。明朝9時に、ロイドのインスペクターが船へ状態を見に行くとのことだった。

造船所は、こちらへだれもよこさないようだ。明日は土曜日、明後日は日曜日で、ともに休日だ。今日返事がなければ週明けまでテレックスが来る可能性は薄い。こちらがこれほど心配しているのに、造船所はそれほど気にかけていないのだろうか。それとも対応に苦慮して結論が出ないのか。

6月30日 シンガポール

約束通り9時、ロイドの検査官来船。船長室でアンカーの現状と、私の希望する修理方法を説明した。ロイドの検査官も私と同意見で、アンカーを収めた状態でシャンク・トップ(アンカーロッドの最上部)がホースパイプに当たらないようにすれば、スムーズに落ちるだろうといていた。つまりホースパイプの径を大きくするということだ。これは船体の強度にも影響する問題だから、私が勝手に業者に指示してやらせるわけにはいかない。

一通り話が終わったところで、実際にアンカーが落ちない状態を確認しようと、全員で船首に行ってみて試してみた。何度やっても良好に落ち、不具合な状態を再現できない。一度落ちると錨を揚げた状態で錆が付くまで、2日間くらいは良好に落下することを船長は知らないらしい。

ロイドの検査官の手前、彼はすっかり困ってしまい「入港の時、落ちなかったのを覚えているだろう」と、私に同意を求めてきた。「確かに落ちなかったのを覚えている」といったら「君は正直だ」と喜んでくれた。

その後、代理店へ行き、造船所へ電話した。鳥羽さんが出た。案の定、私が28日に送ったテレックスを見ていない。船長は完全によくなるまで出帆しないし、ロイドの検査官も出帆を許可しないといっている由伝えた。彼は「工場長や設計と相談し、最も良い方法を検討し、テレックスする」と約束してくれた。

船長と私たち(私と武村)は、代理店の車で水族館と動物園を見て、午後7時頃船へ帰った。てっきり、もう返事のテレックスが来ているものと思っていたのに、何も来ていない。さー大変、空きっ腹もどこへやら、取る物も取りあえず、国際電報電話局へタクシーを飛ばした。途中ラッシュにかかり、1時間以上かかって到着した。午後9時半、日本では11時だ。

鳥羽さんは「文面を英語にして、エージェントへ送った」という。安心するやらガックリくるやらで、いっぺんに疲れが出てしまった。船へ帰ったら、船長が私の部屋へテレックスを入れてあった。それによると、アンカーの爪が当たる外板に、40ミリの鉄片を溶接するというものだ。私には口をはさむ権利はないが、こんな方法で良くなるとは思えない。造船所の設計が提唱した方法だからやるにはやるが。

何のために夕方から走り回っていたのだろうか。高い国際電話やタクシー代を払って、一人でただ忙しくしているだけではないか。テレックスを入れると約束してくれたのだから、どうしてそれを信じて待てないのだ。慌て者、早とちり、おっちょこちょい。自分で自分のばかさ加減に腹が立つ。

船長は「明日、代理店に修理のできる業者を紹介してもらえばよいだろう」といていた。